J・ブルーナーの「発達」観の教育学的意義

―「未成熟期の性格とその利用」の論構成の検討を通して―（2）

小川博久

はじめに

『教育方法学研究』（第六集）において、筆者は、幼児教育にみられる発達観の「対立」の意味を検討した。本稿は、それに続いてブルーナーの「発達」観を検討する。理由は、ブルーナーの「発達」観が、従来の「成熟」説対「環境形成」説の「対立」という擬似的「対立」図式をこえるものだと思うからである。第六集においては、この「対立」が擬似的なものであって、「発達」観としては、「相乗的交互作用」説が正当なものだということを主張し、つぎのようにのべた。

相乗的相互作用説においては、素質あるいは環境の要因が十分な効果をあげるには、他の要因が一定の水準において働くことが必要条件だとされる。そうだとすれば、先にあげた初期学習における臨界期は、特定の学習を可能にするというだけではなく、その臨界期自身が素質と環境の相乗交互作用の結果として説明されなければならない。なぜなら、臨界期はつねに「発達」途上にあらわれるからである。そしてその臨界期の「発達」水準を生みだした素質的要因もまた環境とそれ以前の素質の交互作用の結果でなければならないのである。こう考えると、素質的要因＝遺伝的性質でないことになる。遺伝的性質はつねに潜在能力として説明されるにすぎない。相乗相互作用説がこのような形で論じられたとき、そこで語られる「発達」概念は教育学的なものとなる。なぜなら、「発達」水準に基づいて学習内容が構想されるとともに、特定の学習内容から「発達」水準が予測されるのである。

こうした方向での理論構成をしていると思われるのが、ブルーナーの「発達」観なのである。ブルーナー

は一九七二年八月号の American Psychologist に掲載した論文“Nature and Uses of Immaturity”の中で彼の「発達」概念を明らかにした。この論文の表題自体、相乗的相互作用観に立っている。すなわち、「未成熟期＝発達途上期」は生成されるもの（本質）であるとともに、形成されるもの（学習されるもの＝利用）であるとおさえている。そしてこのような「発達」過程を教育可能性の拡大・進化としてとらえている。(1)

前号のこうした予測をうけて、本稿では、このブルーナー論文の相乗的相互作用説の特色を明らかにし、そこから教育作用を見直すどんな教育学的視野が開かれるかをのべることである。それはとりもなおさず、ブルーナーの「発達」観の教育学的意義を論ずることである。本稿での仮説としては、つぎの通りである。

一、教育学の立場で「発達」を具体的に語ろうとするには、人間が類として規定されている人類学的特性、そしてそれとの関連で生ずる類的存在であるヒトがもつ文化特性を無視することができないのではないか。したがって「発達」と教育との関係を語るためには、意図的教育作用である教授とその結果との関係を微視的に問題にすることよりも、「発達」をうながす条件である類としての人間の存在のあり方、なかんずく文化の様態を分析することが不可欠である。なぜなら、「発達」を条件づける文化の様態こそ広い意味での教育作用の内容を意味するからである。

一、未成熟期研究の意味するもの

ブルーナーは、この論文の冒頭で未成熟期の研究（発達研究）の方法論的な位置づけを改めておこなっている。ブルーナーはいう。

どの種であれ、その性質を十分に理解するためには、その種の成人を理解するだけでは十分ではない。その種の年少者が、始めから、つまり十分成熟していない幼稚な状態から、成熟した、種に特有な機能を発揮する状態にどのように育てられるかを知る必要がある。(2)

ブルーナーは動物（人間を含めた）の種の性質の理解はまさに未成熟期の特色を明らかにすることで可能になるという。これまで「発達」研究は、個を対象とし、多

くの個にみられる普遍性を追求する形でおこなわれてきた。人間の「発達」にみられる普遍性は実証すべき課題ではあったが、仮説とはいえ、既に前提にされていた。ブルーナーは「発達」の研究において種の特殊性を実証すべき課題の前提にすえる。ブルーナーのこの視点は、従来の個を対象とし、普遍性を追求する発達心理学の考え方をこえる。つまり人間という種と他の種との比較という方法、人類学、生物学の視点に立たざるをえない。

とはいえ、ブルーナーの関心はあくまで、人間の「発達」にある。したがって人間の未成熟期の解明のためには、異なる種の未成熟期の特色が、進化史の流れに沿って、人間の未成熟期の特色へと連続的に関連づけられることになる。その結果、種としての人間の特殊性が人間の未成熟期の利用（発達）を規定していることが判明する。従来「発達」研究は、心理学研究がその起源において微視的な生理学的研究から始まったために、ヒトという種が環境に適応する仕方の特殊性をとらえることができなかった。つまり「文化」のもつ「発達」への規定性をとらえられなかったのである。ブルーナーはこの点についてこうのべる。

霊長類の進化について主に考察すべきことの一つは、未成熟期の顕著な（他の種と区別される＝訳者注）パターンを進化が前進的に選択していることである。人間という種が柔軟な適応ができるようになったのは、この前進的選択のパターンによるのである。

われわれの究極の関心は人類の適応が出現したことにあるのだから、なによりもまず、この適応の最も顕著な特徴に目を向けなければならない。それは「文化使用（culture using）」という人間の特性であって人類種にとって典型的な特性である。(3)

ブルーナーは、人文科学者や社会科学者のように、人間が「文化」をもつという特性を暗黙の前提にすることにより、種としての「文化使用」の特性を不問にしようとはしない。だから、ブルーナーにとって、「文化」は進化という自然史と対立し、その外にあるものをさす概念ではない。「文化」はあくまで、進化史の途上に出現した人類という種が外界との交渉の過程でつくり出した環境を意味する。では、その「文化」という名の「環境」は具体的にどのようなものか。

人間は（諸々の制約のもとで）環境を変えることで適応をおこなってきた。つまり、記憶という貯蔵器とともに、一つは、自分の感覚器官や筋肉、計算力などの増幅器、変換器を開発することによって、二つは、文字通り、居住地の諸条件を変えることによってである。まさに人間は人間が作りあげた環境の中で生活するようになってきた。(4)

ブルーナーにとって「文化」は人間の居住地であるこの地球が「文化」の語源である culture（耕す）という語が示すように、変容することを意味するだけではない。その変容を可能にする手段（道具）が考察されることをも意味する。顕微鏡は目の働きの増幅器、変換器であり、交通手段は、筋肉（足）のそれであり、コンピュータは計算力、思考力のそれであり、記憶の貯蔵庫である。このように道具は進化史の過程で獲得してきた手や足の機能、脳や感覚機能の延長線上にとらえられる。かくて人類は、人工化された感覚や筋肉や記憶力の働きで人工化された居住地をつくりあげる。人間はもはや、外界への人工化されたかかわり方（道具使用）とその結果である人工的世界の中でくらすようになっているのである。こうした人間のつくりあげた環境の中で新しい世代が誕生し、成長するのである。こうした環境は未成熟期の成長を規定せずにはおかない。いいかえれば、人間の「発達」研究は、環境要因の変化を外在的に扱えばいいというのではない。ヒトという種の「発達」の内在的要因（例、言語使用、道具使用の潜在能力）を研究対象にすること自体既に、人間の環境としての「文化」を前提にせざるをえないということなのである。こうした人間の「発達」の内在的要因と外在的要因の相互関係についてブルーナーはこういう。

この状況は、人間の未成熟期に特有な負担を負わせている。一つに、そうした変化に富んだ条件に適応するには、遺伝子のプールに貯えられていない知識・技能を獲得するために、学習する機会に依存する度合が非常に大きい。しかし習得しなければならない知識のすべてが直接の出合いで学ばれるわけではない。多くは文化のプールから読みとられ（read out）なければならない。それは数世代にわたって学習され、記憶されたものであり、価値や歴史についての知識、選択の余地のない母国語や選択可能な数学的言語等の多様な

技能、てこを使用するといった非言語の技能、あるいは、神話を語るといった複雑な技能である。未成熟期を形成するための手段として、遺伝子のプールも、直接経験も存在するけれども、このいずれも、人間が環境を変化せしめた結果生ずる新奇性（目新らしさ）に対して直ちに役立つわけではない。(5)

人間は文化を利用して絶えず環境を変化させてきた。したがって、その環境に自ら適応できるように、未成熟期を形成するためには、遺伝子にプールされたもの、直接経験の他に、文化が利用され、それがしめる役割がきわめて大きく、新しい状況への絶えざる柔軟な対応が要求されると、ブルーナーはいう。

とはいえ、この対応が無限に恣意的におこなわれるわけではない。そこには、類的存在にしてのヒトに至る不可避の進化史の制約が存在する。ブルーナーはその方向性についてこういう。

人間の諸特徴は四、五百万年以上にわたって、生存のために価値あるものとして選ばれたものであり、その選択の過程は特にこの後半期に加速度化されてきた。(6)

そして人間が誕生する最終の決定的段階の不可逆的変化をブルーナーはつぎのように要約する。それは「技術＝社会的生活様式」とよばれるもので、その内容としては、一、巨大な歯芽の退行、二、頭脳容積の倍加、三、道具や記号の使用があげられる。これは、「人間化（hominidization）」ともよばれる。(7)

この変化が未成熟期の形成との間にどういう関係をもつかというと、つぎのようになる。この変化は人間になる以前の人間に近似した存在が、最新世紀に存在した諸条件に適応した結果であるので、これを前適応（pre-adaptation）という。そしてこの前適応が遺伝子の一部となっているという。ここにブルーナーの遺伝と環境に関する理解の仕方がある。すなわち、遺伝子のプールは、進化史の過去の過程での適応の結果がくり込まれたものであり、それは、現在の適応の仕方や方向を潜在的に規定する要因になっていると考える。ブルーナーのこの「発達」観は、まさに相互的相乗作用説に立っているといえる。遺伝と環境を対立的に、両極的にとらえるのではなく、遺伝それ自体が進化史の中での前適応の結果が定着したものであると考える。つまり、相互相乗作用をブルーナーは進化史という広大な時間系の中に位置づけ

ているのである。

右のような前適応の遺伝子へのくり込み理論は、現代の人間の未成熟期の問題をこう考える。一例をあげると遺伝子のプールと環境条件と意図的教育作用の関係が相互に矛盾関係にあることをブルーナーは性の問題を事例にして語っている。[8] 前適応の結果である遺伝子のプールは、現在の人間の適応を有利にしているとはいえない。この矛盾を克服する手段として技術革新がおこなわれ、その結果として教授（意図的教育作用）を不可避なものとするのである。人間は、性と生殖を分離し、性を文化としてこれを享受することになった。この性の過剰（他の動物は生殖にのみ支配されている）は、人口増を生んだ。これに対して生みだされた解決法が避妊法である。これは一種の技術革新である。しかしこの技術革新（環境への働きかけ）は新たな環境の変化を生み、そこに新たな問題を発生させる。すなわち、避妊法は、性と生殖の分離を増々促進し、女性の性役割をくみ変える。それはさらに家族構造を変化せしめる。さらにそのことは、子どもにとっての親の権威のあり方を変えていく。アメリカ社会における離婚の増大などはその一例であろう。こうした加速度的な環境の変化に、人間の未成熟期はたえず適応を迫られるのである。その結果未成熟期に対し、教授する（instruction）必要が増大する。急激な技術革新は、多大な環境の変化を招き、今後増々教授への圧力は増大することになる。

ここで、ブルーナーは、教授へのこのような圧力の増大が事態を常に解決に導くとは考えていない。こういう未知の予期せぬ変化に準備しようとすればするほど、人間の遺伝的形質（前適応によって、初期の生活条件に課された厳しい拘束）が融通性のないものとして、適応の方向を拘束する。したがってこうした遺伝的形質を無視して、教授による文化への適応を自在におこなうことはできないという。

ブルーナーは、進化史の筋道がもつ方向性が文化適応のあり方を規定するという形で、遺伝形質の役割を考え、教授といった意図的形成作用の限界を指摘する。では、こうした進化史の中での遺伝形質としての前適応と、教授といった外的要因（環境）の関係は、未成熟期の利用（幼児の発達）をどう規定しているであろうか。

二、教育可能性の発展としての未成熟期の利用の進化

人間の未成熟者がどのように環境への適応をなしとげるか、ブルーナーの言葉をかりれば、ヒトという種が種としての適応をなすために、未成熟者をどう利用するかを知るには、各々の種のケースを進化史的にみていく必要がある。そしてそこで見いだされる未成熟期の利用の仕方の変化をたどることは、ブルーナーにとって、「教育可能性」の発展の筋道をたどることである。なぜなら、それは、各々の種が環境によって形成される可能性の進化を問うことだからである。ここで使われる教育という概念は、これまで云われてきたような人間だけの、人間の文化を前提にしたものではない。もっと広く進化史の中に位置づけられた環境による形成作用を意味している。つまり遺伝子のプールによって規定された要因以外の要因によって形成される事態の総称である。

では、ブルーナーは環境による形成作用をどう整理しているであろうか。

一、種の中の社会組織の性質と進化が未成熟者に与える影響

二、技能の構造の変化の影響、道具使用に至る霊長類の技能の進化の不可避性とその影響

三、二から導かれる遊びと模倣が教育可能性の進化に与えた役割

四、人間の特徴である言語の発生とその本質が種としての人間存在の成立に与えた影響[9]

この四点は、この論文における以下の論構成を示すものであり、それは、未成熟者から成熟者への変化の指標であるとともに、種の進化における知性（問題解決能力、居住地への適応）の進化の指標でもある。一九六〇年代における知育を中心としたカリキュラム改造は、歴史的に否定的評価をうけている。ブルーナーはたしかにカリキュラム改造への反省をおこなっている。しかし、ブルーナーは知性の「発達」への関心を放棄したわけではない。「知性」をより根本的に考えようとする試みをここに見いだすことができる。

三、社会組織のあり様と未成熟期の利用の仕方の関係

社会組織のあり方が未成熟期の利用（発達）に与える影響をブルーナーは生物学の成果から、つぎのようにまとめている。一、テリトリーを分ち合う際のメカニズム、二、略奪者に対抗するための効果的な発信システム、三、先取りされることのない（毎回、ボスが入れ変わる）効果的支配関係、四、集団からつがいを解放するしかけをもった求愛システム。[10] この四つのシステムは相互に関係し合って緊密な固定した構造をもつ種から、それらの関係がゆるやかで、柔軟な構造をもつ種への進化が考えられるが、それにともなって未成熟期の利用の仕方も異ってくる。

前者の種の場合、固定した社会で発生する行動の種目も限定される。したがってその動物の年少者が社会集団にくみ入れられる方法も効果的で早い。つまり群の中の年長者の攻撃の威嚇に年少者がただちに反応するという形である。メスの発情期がはっきりと決まっていることで、年少者は排斥され、一年以内に事実上、自立せざるをえなくなる。また、発情期が決まっていることが、交尾の機会を少なくし、その機会をものにすることと、支配者としての地位につくこととが同義になる。つまり、ボスにならないと交尾のチャンスがなくなるわけである。このように固定した社会構造のもとでは、社会化の方法も単純な威嚇とそれへの反応という形になる。

一方、社会構造が柔軟で多様になるにつれて、社会化（年少者が社会に導入される仕方）も年少者の選択性が増大する。つまり年少者の中に注視構造（attentional structure）が成立する。絶えず敵対的パターンをくり返すかわりに、ボスの行動を予測し、対決を回避し、社会に適応する行動をとる。

こうした注視行動は固定した社会構造のゆるみとともに拡大する。例えば、旧世界猿の世界では、配偶者になる条件、支配の条件、食物調達の条件など、社会組織を成立させる条件に注視行動は限定されている。しかし、大類人猿（例、ゴリラ）では、略奪者に外襲される危険がないことから、なわばりを守るということはない。したがって強固な支配関係もない。たしかにオスの支配はあるが、そうした状況の中で、交尾の専有制はない。支配者でないオスがメスと交尾する機会も保障されている。

こうした一連の組織のゆるみは、交尾期間と子育て期間の分離をあいまいにする。妊娠二ケ月まで交尾が可能である。そのことが子育て期間の延長にもつながってくる。チンパンジーの場合、母と子の絆は五年間も続くのである。

こうした一連の社会組織の柔構造は、子どもの社会化の過程に多様性をもちこんでくる。従来のパターンであった大人の威嚇、違反者の体罰に代って、母子関係の中での年少者の自主的活動が増大する。つまり遊びの増大である。それを母子関係としてみれば、親から子への一方的関係ではなく、相互交換システム（reciprocal exchange）の成立である。そしてこの背景には、大人達の相互システムの増大がある。たとえば、チンパンジーのように一定の居住空間の中で闘争することなく、仲間集団と交わることができる。それは、集団内の性関係、成員の交換としてあらわれる。

ブルーナーは、動物社会の社会組織の進化と未成熟期の利用との関係を右のように理解したのち、この相互交換システムの拡大したものとしてヒトの社会をとらえ、レヴイ・ストロースに基づいて、ヒトの社会の特色を以下のようにとらえる。(11)

一、記号、神話、知識の交換がある。
二、感情の絆の交換、縁組の絆の交換がある。
三、物質とサービスの交換がある。

ヒトの集団では、この交換システムが有効に機能するような個体特性が選択され、個体自らがそうした特性を身につけるよう自己飼育（self domestication）する。したがって未成熟者の利用すなわち、個体の側からみれば、未成熟者の社会化（発達）の様式も著しい変化をもたらす。

既にのべたように、罰と威嚇の減少と、遊び期間の長期化、それに伴なう母親の参加度の増大があげられる。このように親と子が一緒に行動する期間の増大は、親に庇護され安全に過ごす期間の増大を意味し、それは、未成熟者が親の行動を観察する範囲と期間の拡大を意味する。つまり、子どもの模倣行動が拡がるのである。この間、子どもは、おとなの社会的相互作用、交尾、年少者の世話、競争的誇示、道具使用行動を注視し、そうした行動が許容される時点で、自ら試行錯誤する。

このように、ブルーナーは、人間の学習として最も基本的な観察学習の成立条件を社会組織との関係で明らかにする。すなわち、子どもの側からいえば、親の庇護の

もとで、自由な注視行動と試行錯誤が保障されること、親の側からすれば、親が保護者、あるいは争いの緩衝者として、また、モデルあるいは形成者となるのである。

ブルーナーのこうした考え方は、発達というものを個体の側の変化としてのみとらえ、その変化が環境との関係においてどんな構造変化を生みだしているかとらえ得なかった従来の発達観とは著しく異なる。「未成熟期の利用」ということばが示すように、ブルーナーはヒトという種が進化史の過程でとりうる選択は何かという観点で、子どもの発達を語る。ブルーナーはヒトという種がとりうる子どもの成長の条件を「未成熟期の利用」ということばで示すのである。こうしたマクロな視点においてはじめて、未成熟者と環境との相互相乗的関係を相互規定的に具体化しうるとブルーナーは考えたのである。このブルーナーの視点は、幼児期における学習のあり方やあそびの必要性を語るさいにも、重要な意義をもつ。従来のように、個体の成長、あるいは平均的個体の成長にとってのあそびの意義を語るだけではなく、ヒトとして成長するために不可避な条件としてのあそびについて語ることになる。即ち、ブルーナーは、子どもの発達を規定する条件を進化史的な巨視的観点からとらえ、その不可避性をおさえるとともに、他方で、そうした流れの中での選択性、つまり文化的差異、個人的差異を考えようとする。以上のような枠組の中で、ヒトの未成熟期の利用においてみられる具体的特色を以下のように論じている。

四、幼児期における観察学習の重要性

社会構造が柔軟化し、前述のような相互交換システムが発達すると、子どもの社会化の過程も、このおとなの相互交換システムを受容していかなければならない。それには、おとなの行動に注目し、試行錯誤しつつ学びとっていくという観察学習が不可欠である。これなしに子どもの成長はありえない。そこでブルーナーは観察学習の条件についてこういう。

課題から自己を分化させ抽象させる能力、自分自身の行為（performance）をみまわすと、いわば、自分や自分の行為を他者の行為とは別のもの（分化されたもの）としてみることである。これは、別の云い方をすれば、他人の行為の中にある主要な特徴に照して自分

自身の行為をモデル化（イメージ化する＝訳者注）するという形で、自己認識をするということである。[12]

ブルーナーはこれを言語学におけるdeixes（指示機能）と同じだとしている。つまり指示代名詞を使いわけられるということである。観察学習の第二の条件はつぎの通りである。

（それは）今吟味している技能の形式、すなわち、一つのモデルに合致するように、一組の構成要素としての下位常規行動を適切に系列化することで、行動パターンを構成することである。[13]

目と手の協応によって獲得される幼児の技能の発達をみると、特定の個別行為（例、つかむ＝引用者）に始って、さらに単位行為（modular form）が形成され、さらにその高次の総合的技能行為（例、手をのばす、目で自分の手のうごきをとらえる、手と対象物とを同時に視野に入れる、にぎる）に系列化されていく。

こうした一連の行為連鎖としての技能の成立には、二つの重要な戦略がある。一つは、目標に沿って全体をどう組み変えるかについての予想をもつことである。ブルーナーはバーンシュタインの「期待される媒介変数（＝目標のこと、引用者）に沿って環境を変化させる仕方についての運動上の仮説（目標達成の方法として意識されているとはいえないが、身体の動き自体がもっている方向性をいう。引用者注）があるからだ」[14]という主張を根拠にしている。

技能の習熟に関するもう一つの戦略としてあげられるのは、「paraphrases」である。これは、言語学の方では、意味の云いかえということであるが、技能の方では、同一目的を達成させるための他の手段の使用を可能にする代理規則のことを意味している。

この技能に関する二つの原則は、ブルーナーにとっては、言語使用に関する二つの規則と連続的にとらえられるものである。ここでもブルーナーは、言語使用というソフトウェアの技能を、それ以前の技能とつながるものという進化史的なとらえ方をしている。そしてそこでみられる一貫した流れは、知性の発展ということである。ロリス型原猿と人間の間にみられるものをにぎるという行為の差からそれを説明する。前者の場合、様々な課題に同じにぎり方をするのに対し、後者は、手の方向の変

更、速度、または力等の修正など様々なにぎり方をする。これは、手の形態上の差というよりも、それを生みだした「手の使用を制御するプログラムの性質」の問題だとする。このようにブルーナーは、進化史の中での知性の発達を重視し、観察学習における仮説（プログラム）の役割に着目し、これを跡づけ、技能から言語への筋道を構想する。

五、道具使用と遊びとの関係づけについて

ブルーナーは進化史における知性の発達において、ヒトの知性への発展の指標として道具使用をあげる。その際、彼はこの道具使用に至る進化史の筋道を跡づけ、そこに位置づける。道具使用の前史としては、一、二本足歩行による手の自由使用とそれにふさわしい柔軟なプログラミングを提供する頭脳の出現、二、二本足歩行の結果、重力に耐えるための骨盤帯の強化、そのために生ずる産道の狭小化、三、大きな頭脳を支えるために歯列を整え、前に突出したあごを退行させる。四、大きな頭脳をもった生物が狭い産道を通り抜けるために、最初、頭脳が小さく、未成熟で産出されるため、未成熟期が長びくことの四点をあげる。[15]

そして、さらにそこに成立する道具使用の上での進化としては、どうでもいいような種類の道具使用から、人間の生存に不可欠な道具使用への道すじがあるという。この生存に関係のあまりない道具使用が最初に発見されたということは、この道具使用が、むしろ未成熟期に属する存在によって〝あそび〟の中で発見されたことを意味している。ブルーナーはいう。

道具使用が発達するには、組合せ活動のための、選択的で強制されない機会（遊び＝訳者注）が長期的に存在することが必要である。道具使用（または技能活動に対象をくみ入れること）には、その性質上、選択が可能な広汎なヴァリエーションを達成する機会が必要だからである。[16]

ブルーナーはここで、親の庇護のもとに、生存のための、のっぴきならない活動に取り組まずにすむことで、親や周囲の大人の行動を自由に観察したり、自分で、様々な組み合わせ活動の試行錯誤ができる機会、様々な圧力から解放され、安定した心情でいられる〝あそび〟の

機会が、生存に必ずしも必要ない道具の使用を偶然に発見することになったのだという。そして〃あそび〃と道具との関係についてこういう。

第一に、遊びは、より危険のない状況の中で、自分の行為の諸結果を最小にしていく手段、つまり学習の手段である。このことは、特に社会的遊びにあてはまる。――中略――「群れの中でやってよいこと、わるいことの規則が多くある。そしてほとんどが年少期に学習される。この場合、規則に反した結果が後になるより厳しくないのである。」(Dolhinow and Bishop, 1970, p.148)

第二は、機能上の圧力があるときには決して試みられることのない行動の組合せを試みるいい機会を提供する。[17]

上述のような〃あそび〃の学習条件から年少者が学ぶものは、まず第一に、〃あそび〃場面に庇護者としてつきあっている親の行動についての観察学習である。ブルーナーは母親――幼児間の相互作用による密接な関係(setting)の重要性を指摘する。幼児に未だ下位常規行動が習得されなくとも、親の行動が全課題を提示することは、大いに有効だとしている。

しかし〃あそび〃場面で学習することは、単に親の行動を観察学習するだけではない。種々の異った文脈の中で新しい技能の変種を試みることである。〃遊び〃の自由で圧力のない状況がこの変種の誕生に大きく作用する。このようにブルーナーは道具使用の発達に及ぼす〃遊び〃活動の重要性を指摘する。

この〃遊び〃の中で道具使用(技能)の変種が生みだされる仕組みについてブルーナーは二つの条件をあげる。その一つは、論理的な二つのパターンである。一箇のボール(機能)がいろいろな行為(論述)に適合するというのと、いろいろな行為がいろいろな対象物(機能)に適合した形で遂行されるということの二つのパターンである。このパターンは既にのべたように、人間の言語能力のパターンと近似したものとして押えられ、技能から言語への連続的な知性の進化史としてとらえられるのである。例えば、「ジョンは帽子をもつ。」「ジョンは男である。」「ジョンはへいをこえる」という文のように、主格は様々な叙述に展開されるとともに、「帽子をみがく」「帽子を洗う」「帽子を手渡す」という叙述のように、

帽子という対象（機能）に対し、多様な叙述が可能になるという。こうした組み合わせを可能なかぎりくり返し発見するのが、〃遊び〃場面だというのである。[18]

もう一つの条件は、「対象の潜在的構成要素」を予測する能力（dissociation）を新しい状況において使用することである。それはケーラーのいう視覚的に全く安定している状況の「視覚的全体の分解」能力である。

ブルーナーは、道具使用の発展（技能→言語への発展＝知性の発展）の中での〃遊び〃の重要性をくり返し強調する。したがって、ブルーナーの発達観に立つかぎり、人間の発達（霊長類も含めて）は〃遊び〃という環境ならびにそれを成立させた進化史上の〃文化〃状況を無視して、個体の成長を問題にすることはできない。つまり、親の庇護のもとに、それをモデルにしつつ、観察学習し、かつ自由な組み合わせを楽しむ状況を無視できないのである。

六、大人の存在と意図的教育作用成立の根拠

前述の〃遊び〃状況での大人の役割から、大人が教える役割をとることへの発展をブルーナーはつぎのようにとらえる。まず〃遊び〃状況の中では、大人は、庇護者であるということから、愛情の源としての役割と同時にモデルとしての役割を演じた。したがって意図的教育作用としての教授は存在しない。人間でも、狩猟社会では、これが支配的状況だったという。霊長類社会での学習はほとんど〃あそび〃を介してであったといってよいという。

これに対し、「教える」必要性はどのようにして生ずるか。それをブルーナーは学習者側の要求、つまり、「チューター期待感」（tutor proneness）[19]としてとらえる。これは、年少者が大人から学びたいという気持をもつことである。ではこの「期待感」はどういう条件の中で生ずるか。それは、安易に生きられる状況よりも、油断できない生存条件であるとゴリラとチンパンジーを比較した考察を引用していう。

ここで、ブルーナーは、知性の進化において相矛盾した提案がなされたという。その一つは、既に論じられたように、比較的生存上の圧力のない状況での自由な活動が技能の進化に必要であるということであった。それに対し、前述の提案は、それとは逆に、学習者に挑戦を余儀なくさせる状況の必要性ということであった。ブルー

ナーは、D・モリスを引用し、進化に適応する二つのタイプをあげる。一つは、専門家、つまり特殊な環境に生きられるのに最適な機能をもった生物として進化する方向である。もう一つは、機会主義者（opportunist）である。霊長類や人類が選んだ道はこの道である。この種は、様々な環境に適応する柔軟さを身につけているのである。では、人間はどのように、そうした挑戦を余儀なくさせる条件を用意し、柔軟な適応力を獲得していったのであろうか。

クング・ブッシュマンという狩猟民族を例にあげて、ブルーナーは子どもから大人への成長の条件を二つ述べている。[20] 一つは、大人と子どもが、遊び、踊り、狩猟、うた、物語りなどを共有すること、二つは儀式に導入することである。つまり、この儀式に子どもを導入することこそ、子どもにとって新しい、かつ克服されるべき事態なのである。この儀式は、しばしば肉体的苦痛や精神的不安という限界状況に子どもをおとし入れるからである。そしてこの儀式の中に高度に様式化されたものが通過儀礼である。人間は一方で子どもを庇護し、不安をなくし、探究行動をうながす〝遊び〟の機会を提供するとともに、そうした安心感を前提にして、子どもを新奇なもの、挑戦的なものにあえて導入する。そのことによってD・モリスのいう neophilia（新奇愛好性）を育てる。これは、人間だけがなしうる能力であり、環境の変化への無限の適応能力を育てることにもなるのである。

そして人間の子育てを特徴づけるこの遊びと儀式という二つの様式の内容を規定する最大の特色が象徴作用ということである。これまで述べてきた遊びの特色は人間の遊びの特色でもあるが、それに象徴（symbols）と慣習（conventions）がつけ加わるのである。例えば、棒は狩猟の矢として使うだけでなく、足にはさんで馬に見立てられる。「現前の知覚状況からの分離点」であり、「想像上の状況」に適合するものが、馬に見立てられた棒である。ヴイゴッキーのいう想像と現実の要が棒なのである。[21] 遊びの中に見立て（象徴化）が導入されると、そこから二つの結果が生ずる。一つは、遊びが社会的慣習の性質や、慣習それ自体（慣習とは何か）を教える手段になるという。いいかえれば、そこで子どもは手続きの内容の如何にかかわらず手続の一致（多者による）によって成立するという慣習の意味と、様々な慣習を学ぶ。

以上のように、ブルーナーは、遊びの中に儀式性を導入すること、さらにこの両者、遊びと儀式の双方に象徴

作用が導入されることによって、意図的教育作用の基礎が確立されたと考えるのである。

言語の本質と教授、学校の機能の関係

意図的教育作用としての教授の成立を語るためには、言語の本質を語らなければならない。これまでブルーナーは技能と言語の共通性を強調してきた。すなわち、技能行動は言語と同様、云いかえ（paraphrase）と文法をもっているという。この行動の構造と言葉の構造との共通性は言葉のコミュニケーション機能にみられるとブルーナーはいう。両者の関係についてさらにこう展開する。

私は一つの重要な仮説（初期の言語使用はおそらく、行動を支持し、行為と密接に結びついている）を提案するために、行為と言語の構造との類似性を強調してきた。言語の初めの構造と言語のシンタックス（統辞）の普遍的構造は行為の構造の拡張である。シンタックスは、でたらめではなく、その諸事例は行為について信号化したり、行為を表象したりする必要性を反映している。すなわち、その諸事例には、行為者、行為、対象、位置、属性、方向が含まれている。どんな言語であれ、行為者―行為―対象構造は年少の話者に認識される形式である。[22]（傍点、引用者）

行為と言語との間の構造上の共通性を指摘するブルーナーのこの主張は、進化史上での霊長類からヒトへの発達の連続性と、人間の幼児の発達との間の共通性を想定しようとするものである。そこで進化史的には、発話の発生の起点を「援助を求めるという人間的要求」にあるとしたド・ラグナの説を支持する。また、発達論のレベルでは、幼児の初期言語認識は、普通名詞でも単に対象を示すのではなく、子どもの経験において、その対象が関係するすべての行為を示しているという事実をあげる。しかし、やがて人間の言語は直接経験（行動）の文脈から解放されるようになる。ブルーナーはいう。

人間における言語の発達は、文脈（行動の筋道＝引用者注）や、それに随伴する行動から離れる方向に進むだけではない。言語使用者の注意を直接の環境から解き放ち、行為や、視覚でとらえられたものよりむしろ、語られていることに注意を向ける。この過程で、

言語はそれが表わす環境の特色に選択的に注意を向ける強力な道具になる。[23]

このように人間は、環境に対し、つねに言語を介在させてとらえるようになり、環境の直接刺激から解放されるようになる。そして逆に言語が環境理解の仕方やかかわり方をコントロールするようになる。

言語のこうした特色をブルーナーが強調するのは、それが未成熟期の利用のあり方を強く規定するからである。言語の発達がまだそれほどでない狩猟社会では、形式的教授の必要性はなかった。子どもを共同行動に参加されるだけで十分であった。言語は、行動を補助したり、行為を表示するものであった。つまり現在進行中の事柄に注意を向けさせるものにすぎなかった。

つぎの段階では、集団行為を導くことと、神話や呪文によって信仰体系を形成することとの混合物であった。やがて、テクノロジイの発展とともに、直接にそれを使用する状況から離れても、それが役立つように、知識（テクノロジイ）を貯え、かつ表わすことを言語に要求するようになった。この状況をブルーナーはつぎのようにいう。

言語は、増々脱文脈化された形式で、人間にとって知識を伝達する媒体になった。そして書き言葉の出現がこの傾向をさらに増大させることになったことは、もちろんである。知識伝達のこの様式が確立されるようになると、教授が成立する場としての学校が発明される条件が整ったのである。学校は進化史においてごく最近の発達であり、歴史的意味においてさえもそうである。[24]

ブルーナーは、類としてのヒトの発達の特色を進化史の流れに位置づけ、言語の発生から出発し、その蓄積と伝達の必要性という状況の中で、学校というもの、教授というものが、ヒトの発達を規定する条件として発生したことを明らかにした。では、学校は現在、進化史の流れの上でどんな問題を生みだしているか。それは人間の発達（未成熟期の利用）にどういう課題をつきつけているか。

人間の発達における学校の問題点

書きことばの発生と教授の成立との関連性は深いこと

は多くの識者によって指摘されている。[25] ブルーナーはこの関連を、イギリスの哲学者、G・ライルの言葉 knowing how と knowing that の区別を使って展開する。すなわち、脱文脈化された情報の蓄積（書きことばの集積）、学校や教師の成立が承認されるようになってから、「やり方を知る」こと（knowing how）から、「……である」ことを知る（knowing that）ことが重視され、多の知識（knowing that）をもつ大人（教養人）が評価され、それを基準にして幼児にとって必要なものが再規定されるに至った。幼児期に必要なものは、親の庇護（愛情）と予測能力（観察学習による）ではなく、知識、幼児期では、経験の必要が強調されるに至った。

こうした脱文脈化された知識がなぜ要請されたのであろうか。ブルーナーは、その知識の未来の使われ方、過去の使われ方から比較的自由な形で知識が表わされるために、大きな力をもつからだとしている。すなわち、knowing how から knowing that への知識の云いかえは、知能の機能的固定性を解放し、形式的システムに再構成することを意味する。たとえば、ハンマーという言葉を、「克服されるべきあるレベルの抵抗より以上に力が使われること」と云いかえることで、この知識の機能は拡大するのだとする。そしてそれは科学の方法を意味するという。いいかえれば、「特定の問題の解決をより単純な一般的問題の単なる事例とし、それによって知識の適用性の範囲を増大させる」ことなのである。

しかし、こうした知識の変換は二つの問題点をもっているという。一つは、形式的知識の重視は、技能的知識の軽視につながることである。いいかえれば knowing that の知識は容易に knowing how に移行できると誤信することである。ブルーナーはこれを効果（effectiveness）の問題とよぶ。もう一つは、脱文脈化と形式的構造のメッセージが、反ファンタジー的、反遊戯的なものを内在させていることである。ブルーナーはこれを従事（engagement）の問題とよぶ。[26]

現代の学校とそれをとりまく社会の文化はこの二つの点に関して危機的な問題を子育てに投げかけているとブルーナーはいう。まず文化的背景からみていくと、「テクノロジイの進歩につれて、産業活動の効果因子とエネルギー要素が増々人間の共感からかけ離れている」という仮説が成り立つという。人間の役割は作業の制御と組織化を担うことになり、腕や手は、今やエネルギーや技工化のモデルではなくなってしまった。だから、技能や

職業に関係なく、やれ鉄鋼生産だのエネルギー生産だのというように、作業の行為を問題にできるのである。高度な技術社会では、生産と分配の作業過程を一貫して遂行するとか、自分の作業が作業全体の関連の中にどう位置づけられるかも不明になる。作業それ自体への内的動機づけが失なわれてしまう。かくて、職業、能力、技能、システムへの所属感などが若い世代に増々わかりにくくなる。

こうした状況は、学校のあり方をも規定する。まず学校は作業から遊離する。その結果学校自体がメディアとしてのメッセージを含むようになっている。つまり、社会やおとなの生活に役立つかどうかより、学歴がつけばよいというようにである。知識は伝えても、その意義は伝えられていない。ブルーナーがここで主張したいことは、つぎのことである。

若者を社会集団に導入する多くの手段は文化に対する人間の能力の進化が残したものである。しかしそれは、前述のような急激な変化が当然になっている条件の中では、効果を失いつつあるようである。観察と模倣遊び、技能上の問題解決の文脈での実演、チュータ期待感、大家族制や地縁集団等の形での効果的小世界、また職業（vocation）という考え方など、すべておびやかされているように思われる。[27]

ブルーナーは進化史の過程で生まれ、発達してきた未成熟期利用のシステムが今や危機に瀕しているというのである。いわば、無意図的教育というもの、つまり遊びや家庭生活、さらには職業の場で学ぶことがかりにおこなわれたとしても、それでは社会全体の変化に適応できないところに来てしまったというのである。

ブルーナーが問題にしているもう一つの点は、従事の問題である。脱文脈化した形式的構造をもつメッセージの伝達（教授）には、遊びやファンタジーのもつ内発的報酬がなく、したがって学校は因襲的で退屈な所となっている。昔、未だ学校などのない社会では、子どもは、遊びや儀式に導入されることで、解放感や自由とともに、挑戦を余儀なくされる状況やおそれと対決していた。しかし現在の子どもたちは、学校の中でそうした機会をもちえない。だから子どもたちは、しばしば学校外で功利主義者ベンサムの批判する「深い遊び（deep play）」[28]に堕っているという。この「深い遊び」は、非合理的で危

険性が高く、勝つチャンスより、負けるチャンスが大きいものをいう。現在、十代前期の子どもたちさえ、未来のために用意された学校をとび出して、未来を犠牲にしてまで、共同生活的連帯のために、個人の生活をささげようとしている。かつて、大人達は、能力をもつ者のモデルであり、技能を体現する者であったが、今や子どもにとって、かれらは、理解できない存在となり、両者の断絶が聞かれるようになっている。

こうした状況に対し、ブルーナーは、それを克服する方法を具体的には語っていない。ただ、若者達の反社会的行動の意味を問い直し、コンピテンスを改めて定義し直す必要を強調しているだけである。そして、おわりに、権威を失った大人に代って、新しい型の担い手である〝中間世代〟（モデルの役割を担う若い大人達）の出現を歓迎し、それに期待を寄せている。この若い世代は、能力的にも知識的にも、彼等に達していず、刺激を受けることの少ない人々に教え、援助し、示唆し、挑発する責任がとれるような、より共同体的な教育組織に未成熟者を導入する必要がある。そしてそのためには改めて、進化史の中での未成熟期の利用を見なおす必要があるとしてこの論文を結んでいる。

おわりに

現代の教育に対するブルーナーの提言が適切なものであるかどうかの判断は未だ筆者にはできない。しかし進化史という広大な視野でとらえた未成熟期の利用の問題点の分析から聞くべき点は多い。なかでも未成熟期の利用（発達）という視点から、現代の学校の問題が位置づけられたことは注目すべきである。いいかえれば、「発達」研究において背景としてしか捉えられていなかった環境、特に人間の形成因子としての文化を総体として位置づけたことである。その結果、教育が「発達」との関係において論じられるようになったのである。とはいえ、この発達感は、現在の発達心理学が対象としている個体の変化についての実証研究ではない。したがってそこでの個体変化と環境としての文化の相互相乗作用が具体的に解明されたわけではない。しかし、ブルーナーのこの巨視的な視点は、個体発生と環境との関係を問いなおす出発点となると考えられる。今後、具体的な条件と子どもの発達過程との新たな関連づけを構想する基礎づけの論として、「発達」を教育的に論ずる可能性をひらくも

のであろう。

注

(1) 拙稿「幼児教育における発達観の『対立』についての教育学的論討 ― ブルーナーの発達論を評価する手がかりとして ― (1)」 教育方法談話会編『教育方法学研究』第六集 八七頁～八八頁

(2) J. Bruner, The Nature and Uses of Immaturity,"
K.J.Connolly and J.S.Bruner, (ed) The Early Growth of Competence 1972, New York Academic Press p.11

(3) ibid., p.11
(4) ibid., p.11
(5) ibid., p.11～p.12
(6) ibid., p.12
(7) ibid., p.12
(8) ibid., p.12
(9) ibid., p.13～p.14
(10) ibid., p.14
(11) ibid., p.17
(12) ibid., p.19
(13) ibid., p.19
(14) ibid., p.20 から転用
(15) ibid., p.21
(16) ibid., p.21
(17) ibid., p.21～p.22
(18) ibid., p.27
(19) ibid., p.29
(20) ibid., p.31
(21) ibid., p.33
(22) ibid., p.34
(23) ibid., p.36
(24) ibid., p.38
(25) ニール・ポストマン著、小柴一訳『子どもはもういない ― 教育と文化への警告 ― 』新樹社、昭和六十年、第二章以降（三七頁）
(26) ibid., p.41
(27) ibid., p.42
(28) ibid., p.42